

第6回「食の討論会」及び「現地見学会」報告

第6回 食の討論会報告

1. はじめに

地域産業研究会では、「食」をテーマとした討論会を平成17年度より継続的に開催しています。

第6回の食の討論会は昨今、注目されている「食育」に関連して、2007年（平成19年）10月24日にNPO法人 北海道食の自給ネットワーク 事務局長の大熊久美子氏を講師に招いて「これからの北海道農業に期待するもの」と題し、講演と討論会を行いました。



講演会 講師 大熊久美子氏

2. 講演会の概要

① 崩壊する現代の食

昨今の家庭での食卓の実態は、弧（一人一人）、個（各自毎に）、個（固定的メニューを）、粉（小麦粉を使った食品を主体に）、小（小食）の実態が益々増大し、かつ、日常的に出来合い品を購入し、家庭で食べる「中食」が主流となってきている。

また、朝食を中心に欠食率が増大（子ども、独身者）するなど、生活習慣病（成人病）の低年齢化や小中学生の不安愁訴（不定期的に色々な症状がでる：気分が悪い、体がだるい、直ぐに横になりたがる、朝から眠い、イライラするなどの症状）を訴える子が増大するなど「心と体への影響」が出てきていると警鐘されている。

一方、旧来の日本型食生活から現在の食に変わるきっかけは、第2次世界大戦後の食の欧米化や1958年に出たインスタントラーメン、その後の各種冷凍食品やインスタント食品及びファーストフードなどの氾濫が要因となっている。このような「食」の変化の結果、日本の食料自給率は1960年の79%が現在では39%に至っている。

② 新たな生・消の関係を作る「トラスト」

〈食の自給ネットワーク〉では、遺伝子組み換え大豆の輸入に対抗した「大豆トラスト」そして「小麦トラスト」（2002年）により、食料自給率の問題や地産地消の大切さを伝えられると考えた。このトラストを通じて、生産者、加工業者、消費者が一体となって直接的な繋がりを持つことにより、相乗的に相互の意識向上をはかり、「生産者は作り支える意識」「消費者は食べ支える意識」が生まれ、双方で食と農業を守るという、農業のあり方のひとつを示唆するものとなっている。

③ 食育の場としての農業

「食育で健全な心と体を取り戻す」ために、学校での総合学習、修学旅行での農業体験、「食育講座（食の自給ネットワーク）」など、地場産の農産物・海産物などを生産地で直接触れることで、その学習効果が高まっている。子ども達が現場で五感を使って学び、そして生産者の話を聞くことで知識と意識（頭と心）がつながり、食や農業への理解につながるものになっている。

④ 真に安全で安心な「食」とこれからの北海道農業

北海道の基幹産業は第一次産業と観光が2大産業であり、食料生産は全国一（自給率200%超）である。一方、観光面でも北海道の食材と農業景観は大きな要素であり、農業なしに北海道経済は成り立たないものである。

— 食べ方は生き方～豊かな食を目指して —

食事は生命維持の為に必要なだけでなく、家族への愛情を伝える媒体でもあり、どう食べるかはどう生きるかにつながるものである。

したがって、「農業は生命産業」であり「生産者と消費者は運命共同体」との認識のもと、双方で農業と豊かな食を守ることが大切である。

現地見学会報告

去る2007年(平成19年)11月2日(9:30~18:00)、7名の参加者にて現地見学会を開催しました。今回の見学会は「地域とのかかわり、環境との共生、エネルギー、新しい酪農経営」をテーマに企画しました。またシステムなどのソフト面ばかりでなく、「石狩川頭首工」の建設工事等、新たな施工方法や環境配慮工事などのハード面もあわせて視察しました。視察行程は次のとおりです(グラビア参照)。

- ① 北海幹線用水路・光珠内調整池
- ② ラムサール条約登録湿地・宮島沼
- ③ 石狩川頭首工施工現場
- ④ 酪農学園大学 インテリジェント牛舎

1. 北海幹線用水路・光珠内調整池

北海幹線用水路は、農業専用の用水路として日本で最も長いものです。赤平市から5町村をとおり南幌町へと約90kmに及び、受益面積は約1万6,500haに達しています。光珠内調整池は、かんがい目的につくられた農業用ため池で北海幹線用水路のほぼ中央に位置し、豊水期の余剰水を有効利用し、北海幹線不足量を調整池から北海幹線用水路へ補給できる施設で、約150万tの貯水量を有し貯水面積は約36万m²です。ここでは地域住民と一体となり調整池周辺にヤマザクラの植栽などを行い、用水路を地域の財産とする活動がおこなわれています。

2. 宮島沼(ラムサール条約登録湿地)

宮島沼はマガンの渡来地として有名です。見ごろは4月と10月で、今回は時期が外れており水鳥・湿地センターを中心に視察しました。宮島沼保全計画では、マガン等と共生をはかり、保全のみならず農業や、観光、教育への活用という視点で立案されており、これらに少なからず関与している、我々技術

者の役割が大きいことを再認識いたしました。

3. 石狩川頭首工

石狩川頭首工は1963年(昭和38年)に建設された全国有数規模の基幹的水利施設です。老朽化のため全面改築となりましたが、改築にあたっては、様々な魚種に対応する魚道を設置し、魚類等の生息環境を確保しています。また、広域農道と管理用道路を共用しており、地域交通ネットワークと関連した事業になっています。工事は石狩川を3回(中央部→右岸部→左岸部)に分けて締め切り施工されています。既に中央部は終了し、現在は2期工事の右岸部を施工中でした。

現場での印象は、本体工事よりも大規模な仮設工事に驚きました。限られた工期の中で、不確定な自然環境を相手に工事を完成させることには様々な問題点があり、これを克服するための新技術や現場における工夫についての説明をいただきました。

4. 酪農学園大学 インテリジェント牛舎

インテリジェント牛舎は、省資源に寄与する物質循環型の酪農を基軸にしながら、その循環プロセスにおいて高度なITを用い、総合的な管理をおこなっています。その基本となっている技術は個体識別技術であり、個体ごとに自動測定されたデータをもとに、それぞれの状態に応じた飼育がなされています。

例えば、自動搾乳システムでは、乳牛が自発的に搾乳機のところに入り、機械(センサー)が個体の乳房の位置を探りあて、自動的に搾乳していました。

また、排泄物はバイオガスプラントにて低臭の液体有機肥料を生産するとともにバイオガスを回収して、発電器を運転し電気と温水を取り出しています。これらを見ていますと、今後の酪農は電機・機械技術者が主体になるのではと錯覚します。その他にも画期的なシステムが多くありましたが、限られた紙面ですので紹介できず残念です。

最後になりますが、今回の視察に際して、石狩川頭首工作業所宮田所長ならびに酪農学園大学小山広報室室長には、現地案内と丁寧な説明をいただきました。この場をかりてお礼申し上げます。

(文責：地域産業研究会幹事 今井淳一、細川康司)